

## AMR 対策アクションプランを踏まえた細菌検査フローの見直しとその効果

◎園屋 陽平<sup>1)</sup>、播磨 尚寛<sup>1)</sup>、伊藤 千慧<sup>1)</sup>、古田 賢二<sup>1)</sup>  
国立研究開発法人 国立循環器病研究センター<sup>1)</sup>

【目的】抗菌薬の不適切使用を背景とした薬剤耐性菌の増加が問題視され、AMR 対策が重要となっている。厚生労働省からも AMR アクションプランが発表され、成果指標が掲げられた。当院では今年度4月より、抗菌薬スチュワードシップチーム(AST)が発足し活動を開始した。正確な微生物学的診断は抗菌薬適正使用に影響する重要な指標である。細菌検査室の業務フローを見直し、微生物検体の Rejection Criteria の遵守や検査結果の報告体制の再構築を実施した。検査業務が抗菌薬使用や薬剤耐性に及ぼす影響について評価したので報告する。

【方法】2017年12月～2018年3月を業務見直し前、2018年4月～7月を見直し後として検査件数と Sample Reject 数、薬剤感受性実施率、院内で規定されている特定抗菌薬(抗 MRSA 薬、カルバペネム系薬、第4世代セフェム系薬、キノロン系薬、PIPC/TAZ)の AUD、緑膿菌のカルバペネム系薬の薬剤感受性率などを調査、比較した。

【結果】業務見直し前と見直し後の検査件数はそれぞれ 2928 件と 2623 件であり、Sample Reject 数は4件と 118 件

であった。薬剤感受性実施率は 29.6%→4.9%と大きく減少した。特定抗菌薬の AUD は 92.5→82.7 と減少傾向にあり、緑膿菌のカルバペネム系薬剤感受性率も 84.9%→100%と改善傾向を示した。

【結論】細菌検査業務の見直し後、特定抗菌薬の AUD の減少、薬剤感受性率の改善がみられたが、その因果関係は明らかではない。検査業務見直しは、抗菌薬適正使用支援の一端を担う可能性がある。

大阪府吹田市藤白台5丁目7番1号—06-6833-5012